

華露通りという通路がある。

一見上流階級の通りのように感じる名だが、実際は花街である。

噎せ返るような香や化粧の匂い。

煌びやかな明かりの中、鮮やかな朱色の扉が一際目立つ店がある。

その特徴的な扉を持つ『蓮月堂』に、キコはいた。

キコは動かない。

一つの冊子を、青みがかった黒目でこれ以上ないほど熱心に見つめている。

それは何枚もの絵が貼られているものだった。

ふと見つけた冊子が気になっていたところ、遊び相手となった女郎が見せてくれたのである。

「これ、絵？」

「絵じゃアないよ。シヤシンっていうのサ」

「しやしん」

「そ。シヤシン」

言いながら、蓮月堂の女郎はそのほっそりとしたしなやかな指先で「寫眞」と字を描いた。ふうん、と頷き、キコは興味津々といった体で、目の前に開かれたそれをじい、と見つめる。そんなキコの様子を些か奇妙なものを見るようにキコを見遣り、これは昔の“街”だねエ、と女郎は教え

た。まだ“街”がさほど入り組んではいない頃であろうその光景を見るのは、キコにとっては初めてのことであった。

「寫眞なんて珍しいもんでもないだろ？」

「そうなの？ 私、初めて見たわ。あのお部屋にはこんななかつたもの」
そう答えると女郎は一瞬呆けたような、なんとも言えない表情をした。

「……玉兎屋から“街”の昔やら成り立ちやらを聞いたことはないのかイ？」
不思議そうに女郎が尋ねると、キコはうん、と首を縦に振り「聞いた事がないの」と続けた。

玉兎屋の主は不思議な男だ。

先ほどまで窓際で煙管を楽しんでいたかと思うと、ふらりと姿を消している。かと思うといつの間にか帰ってきており、香茶などを楽しんでいるのである。全く不思議な男だ。

不思議といえば、この男は一体どうして自分を手伝いとして雇ったのだろう。

一応、小間使いのような形で働いてはいるが、あの男の素性は杳として知れないままである。そういうえば、室内にはこういった冊子のものはあまり見たことがないなど、はたりとキコはそこで思い至る。

あつたとしても、小難しい文章の羅列や何かの絵図や、細々としたメモ——少なくともこの“街”では一度も見たことのない文字だった——が書き込まれているようなものばかりで、

到底キコには理解できないものばかりであった。

あれま、しようがないねエと呟く。

「まあ、アタシもちやあんと知ってるわけじゃないけどサ。昔はねエ、ここら一帯、なあンにもなかった
「そうよ」

女郎の話によると、ここは元々まっさらな土地だったのだという。

そこにある日、突然団体がやってきた。

小さな石碑が立ち、それを祠で覆い、更に建物が建てられた。

それを護るかのように周囲に建物が建ち始め、やがて流れ者がそこに訪れ留まるようになり、小さな建物の村とも言えないような集落は徐々に規模を大きくしていったのだという。

そうして年月を掛け、今の“街”へと姿を変えた。

「初めてきいたわ」

「本当の話かどうかは知らないヨ。言い伝えのようなものだから」

どこかしみじみとした面持ちで呟いたキコの言葉に、念を押すように女郎は返した。

「ねえ、姐さん。その建物って今どうなってるの？ そんな立派で古い建物、目立つはずだけど見たことないわ」

二重三重に囲まれた建物なのだから、それはとても立派なものなのだろう。

しかし“街”にそのようなものはあっただろうか。そんな話を聞いた事もないのだが。

そう言うと女郎はするりと笑みを浮かべ「キコ、アンタもいつも目にしてるはずだよ」と言った。

「……いつも？」

「そ、いつも。あの“塔”だよ」

“街”の中で一番高く、そして一番影響力のある建築物である“塔”。

「“塔”？」

勢いよく顔を上げると、おかつぱの黒髪と赤いリボンが跳ねた。思わず聞き返してしまう。

「“塔”って、あの“塔”？」

「その“塔”しかないねエ」

面白いものを見たと言わんばかりの口調で女郎は答えた。

「ふうん……」

「さつきも言ったけど、言い伝えみたいなものだからネ。あの“塔”がそれだっていう証拠もない。ま、

おとぎ話としては面白いと思うけどねエ」

「姐さんは知りたいと思わないの？　気にならない？」

「ならないヨ」

「……そうなの」

アンタは本当、知りたがりねエ、と言い、女郎もまた寫眞に目を落とした。

この“街”のほとんどの人間は他者や物の過去に何があったのかということにあまり頓着しない。

頓着しない、というよりは、興味がないという表現が正しいだろうか。

キコ自身、どちらかというとこの“街”では目立つ出で立ちであるが、その事を聞かれたことはほとんどと言って良いほどない。

今まで見知らぬ顔を“街”の色々な地区で見かける度にキコは興味を持ったが、周囲の人々は確かにさほど質問をせずに対応していたなど、その幾度か見た光景を思い出す。

時折不思議に思ったものだが、なるほど元々この“街”という存在が流れ者で出来た故なのか、とキコは内心で深く納得し、

みんなあんまり知られたくないことの方が多そうなものね、と考えたのだった。

